ゴールデンスピリット
GOLDEN SPIRIT AWARD

プロ野球人の社会貢献活動を表彰する報知新聞社制定「ゴールデンスピリット賞」が今年で17回目を迎え、20日までに候補者が出そろった。今年も昨年に並び過去最多タイとなる19選手がノミネート。活動も年々、多岐にわたり、障がい児との交流、小児病棟への訪問、ランドセル基金、海外への支援など、多くの選手がさまざまな社会貢献に携わっている。〝日本版ロベルト・クレメンテ賞〟は11月5日に発表される。

第17回受賞者 来月5日発表

主催　報知新聞社
後援　一般社団法人日本野球機構
協賛　株式会社サァラ麻布
キヤノンマーケティングジャパン株式会社
VELLFIRE
株式会社トーヨー建設／株式会社トーヨーエネルギーファーム
保険情報サービス株式会社
株式会社岡田製作所

プロ野球人の社会貢献活動を表彰

球場外でもヒーロー
日本版ロベルト・クレメンテ賞

佐山 和夫（ノンフィクション作家）

ベースボールの歴史を見てみると、それは最初から、他のスポーツとは違った特徴を持っていたことがわかる。

初めて入場料を取ってゲームを見せたのは、1858年7月、ニューヨーク対ブルックリンの3連戦だったが、ファンは50セントを払って観戦に押しかけた。もちろん、ゲームへの興味のせいでもあったが、収益がすべて火の犠牲となった消防士たちの遺族にささげられるとされていたからでもあった。まだ木造建築がひしめく時代、消防士といっても自警団。市民が互いに支え合って生きていく先導役を、野球選手たちが引き受けたのだ。

こうした社会性があったからこそ、新聞がこの連戦をニュースとして扱ったことから、ベースボールというゲームが広く世に知られていくことになる。

1972年12月。ニカラグアで大地震が発生した。そのときプエルトリコ出身の大リーガー、ピッツバーグ・パイレーツのロベルト・クレメンテ選手が、率先して救済の手を差し伸べたのも、その歴史と無縁ではない。並外れた強肩と、パンチのきいた打撃で知られる名手だ。一貫してパイレーツのライトを守って18年。そのシーズン最後のゲームでは、通算3000本目となる安打を放っていた。

ラジオ放送を通じて集めた物資を運ぶため、彼は救援機4機を調達。12月31日、その最後の機にみずからも乗り込んでサンファンを発（た）ったまではよかったが、まさかこれがエンジントラブルで海に落ちようとは。

アメリカ野球界は彼への哀惜の情をこめて、それまであった「コミッショナー賞」を「ロベルト・クレメンテ賞」と改称、球界最高の賞としたのだ。こうして、社会への貢献度の最も大きかった野球人に、毎年それは与えられているが、その日本版として生まれたのが、「ゴールデンスピリット賞」だ。1999年、報知新聞社スポーツ紙発刊50周年記念事業として誕生し、今年で早くも17回になる。

社会の闇を切り開き、時代に明るく行く手を指し示すベースボール当初からの使命は、歴史を経てさらに大きくなった。本年、セ・パ両リーグの球団から推薦されて名を挙げられた「善意の使者」たちは19人。いずれもがみずからすすんで尊い社会貢献に献身された。その中から、日本における今年の最高貢献者として、1人の名が11月5日に発表される。

強打強肩でパイレーツ2度の世界一に貢献したクレメンテは、奉仕の精神でもメジャーを代表する選手だった（ゲッティ＝共同）

1858年初の有料ゲームは収益すべて殉職消防士遺族へ

セ・リーグノミネート

内海 哲也（巨人）
09年1月に、親元を離れて暮らす児童養護施設の子どもにランドセルを贈る「内海哲也ランドセル基金」を設立。奪三振や投球イニングに応じて、過去7シーズンで計959個を贈っている。

村田 修一（巨人）
06年に生まれた長男が低出生体重児だったことから08年に新生児医療への支援活動を開始。12年からは「さささえるん打基金」と題し1打点につき1万円を寄付。少しでも多く支援しようと、昨季からは1安打につき1万円に変更している。

杉内 俊哉（巨人）
05年に「杉内基金」を設立。勝利数や投球数に応じ車いすやAED（自動体外式除細動器）を贈ったほか、骨髄バンクも支援。巨人移籍後は1球投げるごとに1000円を積み立てる「1球基金」を設立し、東日本大震災の被災地に医薬品などを寄贈した。

岩田 稔（阪神）
自身が高校2年時に発症した1型糖尿病の患者のため、09年から毎年1勝につき10万円を「1型糖尿病研究基金」に寄付。昨年までで350万円に達した。また、08年から患者と家族230人以上を試合に招待している。

梵 英心（広島）
知人を通じて盲導犬支援の話を知ったのを機に5年以上、毎年4月に年俸の一部を日本盲導犬協会に寄付している。また、今年9月の東日本豪雨災害の際には、率先して募金活動を行い、協力を呼びかけた。

荒木 雅博（中日）
病院慰問を05年から11年間続けており、車いすやストレッチャーを寄贈している。毎年チームメートとともに、名古屋市の名古屋第一赤十字病院を慰問し、患者と交流している。

山井 大介（中日）
一昨年6月にノーヒットノーランを達成した記念グッズの売り上げで野球用具を購入。同年オフに宮城・気仙沼市内の社会福祉法人旭が丘学園を訪れ、購入した野球用具を東日本大震災の被災地へ寄贈した。

筒香 嘉智（DeNA）
昨オフにドミニカ共和国で行われたウィンターリーグ視察の際、野球が盛んでありながら用具が不足しているのを目の当たりにし、支援を開始。同国とグアテマラ共和国にNPO法人「BBフューチャー」を通じ用具を提供した。

館山 昌平（ヤクルト）
パラリンピックを支援していく中で特別支援学校の生徒たちに出会い、14年は160人、15年は90人の生徒を試合に招待。また今年1月には筑波大学付属市川聴覚特別支援学校を訪問した。

近藤 一樹（オリックス）
昨シーズンからは個室型観戦室に病気の子どもらを招待し、試合後に激励に訪れている。09年8月にポリオワクチンの寄付活動を開始し、現在も継続している。投

今江 敏晃（ロッテ）
06年から障がい者野球チーム「群馬アトム」と交流を始め試合に招待。08年からは千葉県の体などにスニーカー、参考書、かばん、おむつ、文房具などを購入し寄贈。台湾原住民の少年野球チームに用具を贈る活動も行っている。

渡辺 直人（西武）
13年から千葉・館山市の病弱支援学校の母子家庭の親子を球場へ招待。13年54人、14年は56人、今年も約50人を招待し、グラウンドで記念撮影などを行った。自身が母子家庭で育った経験から、13年から千葉県内の

嶋 基宏（楽天）
自身の応援タオルのカラーがピンクであることにちなみ、今年から自身のヒット1本につき1万円を、公益社団法人日本対がん協会が仙台市で開催するピンクリボンフェスティバルに寄付することを発表した。

炭谷銀仁朗（西武）
今年から公益財団法人「難病の子どもとその家族へ夢を」を通じて年間約1を啓発するピンクリボン運動を08年から13年まで行ったが、日本球界に復帰した今年、再スタート。守備機会1回った経験から、今年「埼玉県母子寡婦福祉連合会」を通じ、埼玉県内のひとり親家庭の親子を計4試合に招待。試合前には招待者と交流した。

日本では試合での活躍を基準にした賞がほとんどで、球場外の功績を評価する表彰制度は初めて。いわば「球場外のMVP」。受賞者にはゴールデントロフィー（東京芸術大学名誉教授・絹谷幸二氏作成のブロンズ像）と阿部雄二賞（100万円）が贈られる。また受賞者が指定する団体、施設などに報知新聞社が200万円を寄贈する。